

家と拡大してゆくなかで、なぜに「顕彰」することが戦争
正当化につながるのか評者には今一つ解せないのである。

（東洋書林、平成十七年五月、A5判、四三〇頁、本体
六〇〇〇円）

（札幌村神社宮司）

矢野敬一 著

『慰霊・追悼・顕彰の近代』

高原 光 啓

近代日本の慰霊や顕彰に関する研究が盛んである。藤田大誠氏の整理（日本における慰霊・追悼・顕彰研究の現状と課題）、『神社本庁教学研究所紀要』第十二号）によれば、「神道学や宗教学のみならず、歴史学・社会学・民俗学・文化人類学・政治学・法学など多彩な観点から行なはれてゐる」という。こうした多様な研究がある中で、ここに紹介する本書は民俗学の立場からと位置づけられる。著者の矢野敬一氏は長年新潟県、特に岩船郡内を詳細に調査し、その蓄積を基に慰霊・追悼・顕彰に関わる諸相を考察する。その際の目的は、

近代において慰霊、追悼、そして顕彰といった事象がどのような政治的力学をはらみ、またそうした力学を通して家あるいは郷土というローカルな次元での共同性がいかに構成、もしくは再編成されてナショナルな次元へと接合されていたのか、もしくははされていない

かったのかということを論じることにある。

とする。無論、これだけでは具体的にどういうことを意味するかは分かりにくく、追々、内容を略述する中で理解されると思うが、まず内容紹介の前に触れておきたいのは、著者の慰霊・追悼・顕彰の定義である。慰霊とは「聖職者が関与し何らかの宗教的儀礼をともなつて死者の霊に対応する場合」を指し、「聖職者が関与せずに死者を想起して悼む場合」を追悼とする。また顕彰には「傑出した故人の業績を記念し、それを何らかの形で後世に伝えようとする世俗的な性格を帯び」という。つまり、宗教性のある慰霊、世俗的な顕彰、その中間に宗教色・世俗性共に希薄な追悼があると位置づけている。このようにそれぞれを明確にし、論及しようとしている点は注目すべきであろう。

しかも、こうした慰霊・追悼・顕彰には様々な政治的力学が作用すると言うのである。そして、その力学を明かすべく、以下の論を展開する。

序 近代における慰霊・追悼・顕彰研究の視角と方法

一 本書の課題

二 国民道徳論における祖先

第一部 死者へのまなざしと慰霊・追悼・顕彰の編成

第一章 戦死者と新聞報道―昭和期の『新潟新聞』

にみる慰霊・追悼・顕彰の言説的枠組み

第二章 郷土という次元での戦死者

第三章 祖先祭祀と家の歴史の編成

第二部 人物の顕彰と郷土史像の編成

第一章 旧藩主・旧藩時代と郷土意識

第二章 戦国武将の顕彰と祭祀の誕生―名勝の発見とメディア・イベント

第三章 古代へのまなざしと郷土史の方法

結 家と祖先をめぐる知の成立と展開

先ず序の前半において、先述した本書の目的、位置づけが語られる。慰霊・追悼・顕彰のはらむ政治的力学とは何か。その力学によつて家や郷土はいかなる影響を受けたのか。近代以降、家や郷土の一体性はどのように形成されたのか、といった諸問題を検証することを明言する。後半では祖先に関する問題について、「明治四〇年代、道徳教育への国家による統制と相まって唱道された国家主義的道徳運動の産物」である国民道徳論を手がかりに検討する。国民道徳論では祖先崇拜が重要な位置を占めていたが、その背景には当時祖先祭祀の衰退化への危機感があり、祖先崇拜のあり方の再編成が求められていたという。祖先を私的、公的次元に区別し、公的な祖先は公祖・国民的祖先などと概念化され、国民誰もが崇拜すべき祖先を持つよう図った。そのことによつて国民一人一人が祖先との関係を認識し、

改めて家、郷土、国などへ意識が向けられるようになったと分析する。

第一部では、戦死を含めた死をどのように慰霊・追悼・顕彰の対象へと化する仕組みが編成されていたのか。個別の死がいかにナショナルな次元と関わるのか、また、その過程で編成されゆく家や郷土のあり方などを課題とする。第一章では、新潟県における戦死者の公葬のあり方について、新聞報道の分析を通じて試みられる。その儀式全般のみならず、我が子を失った遺族のあるべき姿も新聞記事は示し、読者を導いていたことを指摘する。第二章では、郷土全体が戦死者をどう受け止め、どう関わったか考察する。郷土は戦死者を自分たちの誇りであると受け止めたという。そうした一体性の成立に公葬が果たした役割は大きいと捉え、その実像から検討している。第三章では、家における死はどう扱われ、慰霊・追悼・顕彰はどのようになされたかを考察する。具体的には、ある家の墓、過去帳、位牌、神棚仏壇などから祖先祭祀の移り変わりを読み取る。一見、田舎の、言わばローカルな祖先祭祀の実態が窺えるが、その中にはナショナルな次元である皇室に縁ある物や戦争の影響が見られるという指摘は印象的だ。

第二部では、近世・中世・古代それぞれの歴史上の人物が郷土の中でどのように認識され、受け止められていった

か。その人物に関わる慰霊・顕彰はいかなる物だったか検証される。第一章において、旧藩主や旧藩時代が求心力を持つようになり、旧藩主が地域の歴史的一体性を成立させる役割を担ったことを明らかにしている。また、明治以降に旧藩主などを奉祀した神社が相次いで創建されていった背景の中で、慰霊・顕彰の対象となるだけではなく、旧藩主が旧藩臣に対する追悼・慰霊も司った事例を紹介。多様な慰霊・追悼・顕彰像を提示する。第二章では、ある戦国武将への慰霊・顕彰がどのように成立し、そのことによって郷土の一体性がいかに作用したか。また、その過程で見出される娯楽的な要素も視野に入れつつ幅広く論じられる。第三章では、神話に登場する奴奈川姫を対象にし、その顕彰に至る道程、当時の奴奈川姫を巡る郷土研究や郷土教育の手法を鮮明にする。そこには柳田国男の民間伝承論の受容過程も明らかにされていて読み応えのある論考である。

最後の結では、これまでの論及を踏まえ、農村社会学と民俗学から家や祖先に関わる言及を検討。とりわけ鈴木栄太郎の『日本農村社会学原理』や柳田国男の『先祖の話』を中心に取り上げる。中でも、柳田の論と国民道徳論との関係や柳田の祖先観を探る部分は惹き付けられる。章末では現今の死を巡る状況を概観する中で、家のあり方や来世観の変容を指摘する。この二つは柳田が描いた世界観の根

幹を成す部分でありながらも、最早、従前の世界観が共有されていらない現状を確認する。このことが慰霊・追悼・顕彰にいかなる影響を与えるのか、生と死をめぐるあり方はどのように展開するのかといった新たな問いを示し、本書の締めくくりとなる。

ここまで本書の大まかな内容について紹介してきた。ここからは評者の関心に引きつけつつ所感を述べたい。先ず感嘆すべきは、筆者の資料を渉猟した労力である。膨大な参考文献、郷土資料、新聞雑誌等を丹念に読み込み分析を重ね、慰霊・追悼・顕彰の諸相と、その背景にある力学を浮かび上がらす、その論の進め方には謹んで敬意を表したい。本書ではローカルな次元に属する家や郷土の多種多様な慰霊・追悼・顕彰を考察している。そこには様々な力学が作用していることを看破し、その力学により家や郷土が一体性を持つに至ったと指摘する。更にそこからナショナルな次元へと繋がる道筋がついたという視点は重要に感じられた。そこで、第一部の戦死者を巡る論述を通して少し検討してみたい。そもそも、慰霊・追悼・顕彰の近代と来れば、靖国神社のことを想起するが、本書では主題とされない。何故かという、「靖国での祭祀に収斂される戦死者の慰霊は、何ゆえ国民全体で共有すべきものとして受け止められていったのか。こうした問題を勘案するうえで、

よりローカルな次元での戦死者に対する慰霊・追悼・顕彰の様相が問われねばなるまい」という問題意識に基づいているからである。

ここで疑問が生じる。国民道徳論やメディアなどの影響はあつたとは言え、ローカルからナショナルな次元へと容易に展開することは果たして可能だろうか、と。その点に關しては、感情の共同体という考え方を以て説明している。これは「戦死の意義を共に受け止め、戦死者を追悼し慰霊へと向かう感情を共有する範囲」を意味しているという。こうした共同性があればこそ「戦死者個々がたんに遺族の追悼対象となるだけではなく、郷土というローカルな次元、さらにナショナルな次元で追悼対象と化し慰霊すべき存在となることが可能となる」というのである。このような構造があつたという指摘は納得できる。ただ、感情の共同体と言えども恐らくその内実は複雑であり、ローカルからナショナルへと移る方向性は多様なのではないだろうか。戦死者の問題から離れるが、この点に關して著者は第一部第三章にて祖先祭祀の実態を検討する中で、他家との違いを例にしながら「祖先をめぐる認識の力学はけっして一枚岩ではな」と認めている。著者自身強調する「家単位、地域単位での微視的な力学だけではなく、さらに国家による関与も加味しつつ、その内実を丹念に読み取る必要

がある」という問題意識からの更なる論及が欲しい。

その際、「国家による関与」という点から、制度的側面への言及も要すると思われる。第一部第二章で公葬の形式が問題にされているが、当該時期である昭和十年代は神社祭祀制度が見直され、整備・充実されていた時期と重なる。そうした制度の変遷が地域・氏神、祭祀等を通じてローカルな人々にいかなる影響を与えたのか検証することは重要ではなからうか。即ち、中央の施策がどのように変化を与えたか、というナショナル、ローカルそれぞれの次元の兼ね合いを視野に入れた論考を読んでみたい。

更に敢えて言うと、慰霊・追悼・顕彰の近代を扱うことは、その三つの現在にも繋がる問題になると思われる。本書の結で若干触れられているが、日本人の宗教観や靈魂観、地域のある方など大きく変容している（石井研士著『データブック現代日本人の宗教 増補改訂版』参照）。そうした中において、近代の慰霊・追悼・顕彰はどう受け止められているのか、また今後、慰霊・追悼・顕彰はどう展開していくのか、矢野氏ならではの詳細な研究を期待するところである。

以上、縷々述べてきた。誤読を犯した点もあったかと恐れる。加えて、無い物ねだりの所感を述べてしまったかもしれない。一切の責任は評者にあることをお断りしてお

く。評者の愚考に拘わらず、本書の持つ価値は損なわれない。慰霊・追悼・顕彰、国民道徳論、近代日本の地域社会といった重要な問題を考える上で示唆的な一冊であり、会員諸氏はじめ一般読者にもお薦めする。慰霊・追悼・顕彰研究の更なる深化を願いつつ、書評を終えたい。

（吉川弘文館、平成十八年三月、A5判、二八六頁、本体七〇〇円）

（甲斐奈神社権禰宜）